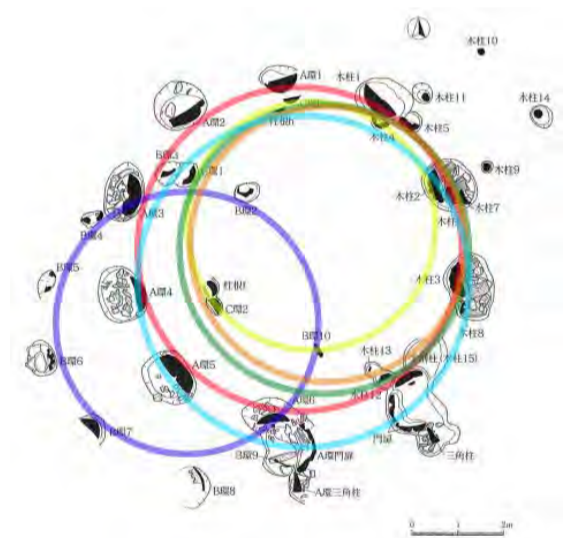


環状木柱列について

環状木柱列は、北陸地方で出土する縄文時代晩期の特殊な遺構である。8本から10本ほどの巨大なクリの木の柱が直径10m前後の円環状に配置されている。特徴的なのは、それぞれのクリの木は芯の部分を除いてかまぼこ状に半截され、平らな面を外側に配されていることである。それはまるで架空の一本の巨大な樹木を内側から裏返したかのようでもある。内部から見ると木肌が見え、外部は人工的に加工されていることになる。

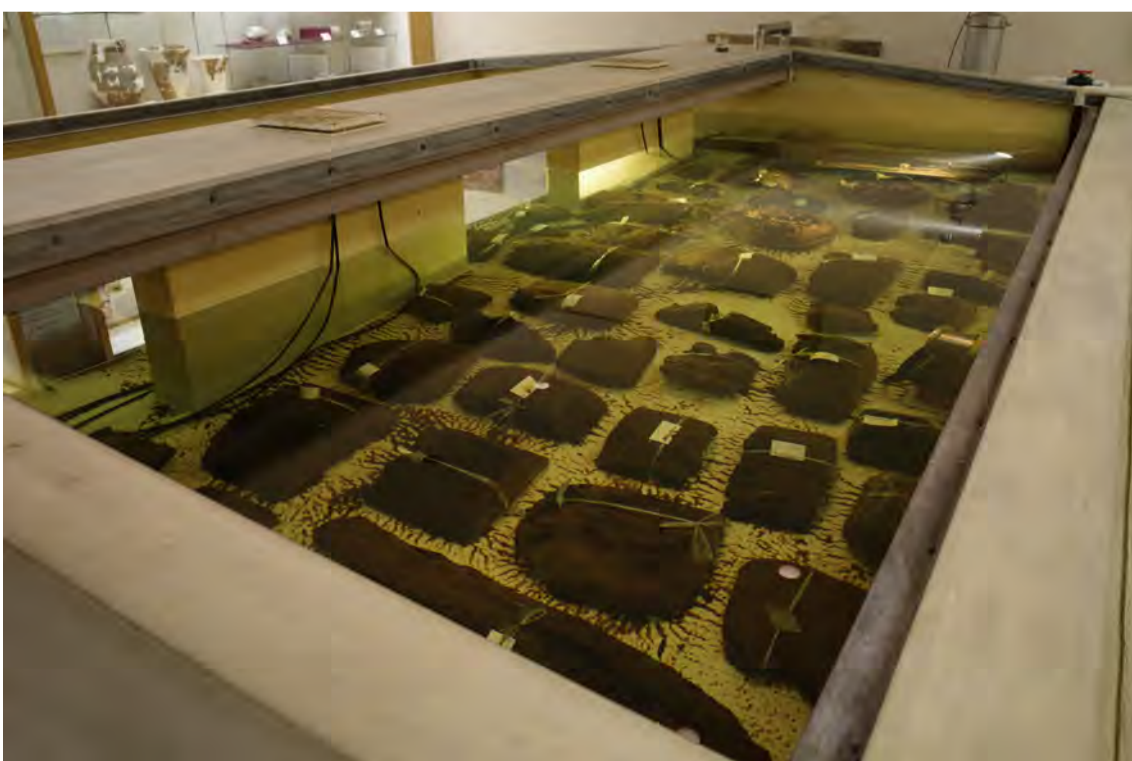
何度も同じ位置に柱が立て替えられたとされるその場所で、何らかの祭祀が行われていたのではないとも言われているが、それがどのようなものであったのかは全く分かっていない。また考古学者も語ることをあえて避けている。

これらの環状木柱列やさまざまな土偶を含め、縄文時代の面白さは、現在私たちが持っている既成の神概念—古事記や日本書紀の様々な人格神、一神教の神、祖先の霊など—を一旦、宙づりにし疑わせることにある。名付けようもない「何か」がそこにいた。



真脇遺跡木柱列あと：

「この環状木柱列が同じ場所で何度も立て替えられているということです。真脇遺跡では少なくとも6回の立て替えが認められました。」
(真脇遺跡縄文館ホームページより)



現地で、あるいは埋蔵センターなどで遺跡として私たちが目にするのは想像上の復元展示である。実際に発掘されたのは地下に残った柱の根元部分（木柱根）である。チカモリ遺跡横の埋蔵文化センターでは、木柱根が水中保存されている。